

医療保険領域におけるデータ活用の現状と課題

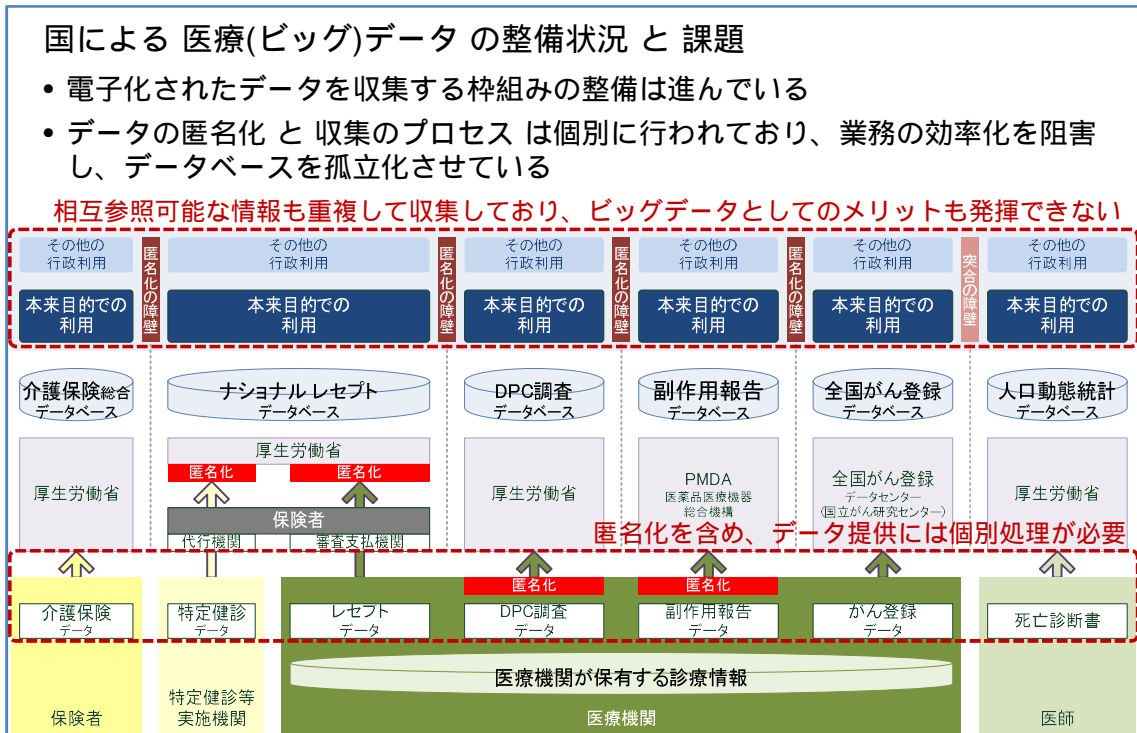
石川 ベンジャミン光一

国立がん研究センター がん対策情報センター がん統計研究部

医療保険領域におけるデータについては、前世紀末以降に病院情報システムの機能が充実し、電子カルテが広く使われるようになることで、源となる医療機関における情報の電子化が進んできた。またその一方で、レセプト電算処理システムやDPC調査などを通じてデータを送信するための標準フォーマットが普及することにより、医療機関の枠を超えて大量のデータを集積することが可能になっている。

このような環境の中で、近年は地域共有型電子カルテや Personal Health Record など個別患者の診療をサポートするための情報の集約化や、行政における活用に向けて国が整備するデータベース、研究・その他の目的での利用を目指した症例データベースなど様々な形でデータの活用が進んでいる。しかしながら、データがサイロ化された環境に縛られていたり、データ収集のプロセスが集約化されていないために情報を提供する医療機関側の負担が最小化されていないなどの課題も認識されてきている。

今回の教育講演では、こうした状況について俯瞰すると共に、将来に向けて課題を解決していくためのアイデアについて紹介する。



第7回健康・医療戦略参与会合：堀田参与提出資料を元に一部改変

原典：<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kenkouiryou/sanyokaigou/dai7/t5.pdf>

キーワード：ビッグデータ、データフェデレーション、最適化